冬の信州　魚と人 4

千曲川のサケ

遡上できる環境を未来に

上田市の千曲川支流・浦野川。15日、雪で真っ白になった河原を慣れた足取りで歩く男性がいた。地域で環境について学んだり、美化活動をしたりしている住民団体の代表世話人、石井孝二さん(52)＝上田市小泉＝だ。手にしたデジタル水温計を15秒ほど水に入れると、数値は3・2度で安定した。すぐそばの川底では、数日中にもサケのふ化が始まる見通しだ。

「千曲川（新潟県内では信濃川）に、サケの遡上できる環境を取り戻したい」。こう考える新潟市のNPO法人新潟水辺の会は昨年12月16日、サケの受精卵約1万個を浦野川に運び込んだ。合成樹脂製の籠に入れ、石を載せて川底に固定。ふ化後しばらくすると籠の隙間から泳ぎ出せるようにした。受精卵の管理を引き受けたのが、水辺の会の思いに賛同する石井さんたちの団体だ。石井さんは年末年始も休まず川に通い、同じ場所で水温を調べている。

野沢温泉小学校の児童たちが卵から育てているサケの稚魚＝16日

かつて、たくさんのサケが上った記録が残る千曲川。長野県の資料によると、昭和初期には年間60～70トンの漁獲があった。急減したのは昭和10年代。長野、新潟県境に鉄道省（JRの前身）の宮中取水ダム（新潟県十日町市）と東京電燈株式会社（東京電力の前身）の西大滝ダム（飯山市）という二つの発電用ダムができてからだ。1950（昭和25）年を最後に、長野県の漁獲統計からサケが消えた。

70年代末から約20年間、県主導でサケの稚魚を放す試みもあったが、実績が出ないまま事業は終了した。その後、河川環境への関心の高まりを背景に、ダムの放水量が増えつつあった。2007年から稚魚放流に取り組んだのが、大熊孝・新潟大名誉教授が代表を務める水辺の会だ。これまでに放した稚魚は計約130万匹に上る。

近年、両ダムでの調査では、遡上するサケが増加傾向にある。同会は自然産卵により近い状態をつくろうと、受精卵を川底に置くことにし、候補地を探した。上田市の千曲川では2010年と昨年、遡上したとみられるサケの死骸が見つかっている。川に熱い思いを抱く石井さんたちと出会ったこともあり、浦野川を選んだ。

サケの受精卵がある浦野川で水温を測る石井さん＝15日

各地でふ化・放流の試み

「頭を小石の間に突っ込んでいるよ」「1匹が動くと周りのみんなも動くね」。浦野川から約70キロ下流の下高井郡野沢温泉村。野沢温泉小学校の水槽では、一足早くかえった稚魚たちが元気に体を動かしている。世話係の5年生のにぎやかな声が校内に響く。

水辺の会は10、11年度に続き、本年度も同校など県内の3小学校に受精卵を200～300個ずつ提供した。同校の卵は年明けにふ化した。児童たちは3月、稚魚を村内の千曲川に放す計画だ。

16日に観察当番を務めた畔上祥吾君(11)は「どんどん元気になってくるんです」と驚き、森美侑季さん(11)は「成長するのがかわいいです。帰ってきてほしい」と期待した。「世話を通して生きものの命を感じられればいいのかなあと思います」と担任の角間史康教諭(42)。児童と共に成長を見守る毎日が楽しそうだ。

信濃毎日新聞　H25.1.18 発行

斜面

2013.2.15

千曲川（信濃川）にサケが遡上できる環境を取り戻したい―。新潟市のNPO法人「新潟水辺の会」はこんな目標を掲げ、2007年から稚魚の放流に取り組んできた。ことしも来月、千曲川と信濃川で行う◆地道な取り組みだけれど、成果は少しずつ見えてきている。飯山市と下高井郡野沢温泉村境の千曲川にある東京電力西大滝ダムで確認できたサケは、11年35匹、昨年11匹。かつては確認できない年もあった。上田市にまで上ったサケも2匹。話題を呼んだ◆放流のほか、川で自然にふ化させる試みも始めている。上田市の千曲川支流の浦野川に昨年12月、籠に入れたサケの受精卵を置いた。独立行政法人水産総合研究センターの日本海区水産研究所（新潟市）によると、本州の日本海側では初めての試みだという◆長野県内の小学校に、卵から稚魚を育てて川に放すことも提案している。本年度は野沢温泉小など3校に受精卵を提供し、児童たちがふ化する前から見守ってきた。川と海を行き来するサケの世話をした体験を忘れずに、大人になっていってほしいと思う◆「市民環境放流」と銘打った放流は参加自由。千曲川と支流での日程は▽3月9日午前―西大滝ダム下流右岸▽9日午後―浦野川▽10日午前―上水内郡信濃町の鳥居川▽10日午後―下高井郡木島平村の馬曲川。事務局は加藤功さん（☎025・230・3910）

信濃毎日新聞　H25.2.15 発行

上田・野沢温泉

無事 帰っておいで
サケの稚魚を放流

千曲川などで児童ら

長野、新潟両県内の千曲川や信濃川などで、サケが遡上できる環境づくりを進める新潟市のNPO法人「新潟水辺の会」は9日、上田市の千曲川支流の浦野川と、下高井郡野沢温泉村の千曲川を皮切りにサケの稚魚の放流を始めた。ことしは両県で計15万匹を放す計画。4、5センチほどの稚魚は、順調に育てば3〜5年後、海から戻ってくる。

上田市小泉の「上田 道と川の駅」北側の浦野川には約300人が集まり、1万匹ほどを放流。バケツを傾けて稚魚を水面近くでゆっくりと放し、戻ってくるよう願った。昨年12月から校内で卵から育ててきた同市南小学校4年生も参加して約150匹を送り出した。

同市下之条の千曲川では2010年と昨年、新潟県側から200キロ以上遡上したとみられるサケが1匹ずつ見つかっている。昨年に続いて放流に参加した千曲市八幡出身の宮沢洋史さん(67)＝埼玉県蓮田市＝は「千曲川は子どもの頃によく泳いでいた思い出の場所。嫌なニュースが多い中、サケの遡上は夢があっていいですね」と話した。

野沢温泉村の千曲川では、稚魚を育ててきた野沢温泉小学校5年生と、近くの栄小学校（下水内郡栄村）、岡山小学校（飯山市）の児童も加わって総勢約150人が集まり、約2万5千匹を放流した。岡山小5年の鷲尾聖哉君(10)は「ちゃんと帰って来られますように―と思いながら放した」と話していた。

野沢温泉村の千曲川でサケの稚魚を放流する人たち

信濃毎日新聞　H25.3.10 発行

斜面

2013.3.13

重さ1グラム、体長4、5センチほどに育ったサケの稚魚が入ったバケツを川面にそっとつける。初めての川の水に驚いたかのように、稚魚はバケツの中を動き回る。じきになじむのか、次々と流れへ泳ぎだしていく◆新潟市のNPO法人「新潟水辺の会」が9、10日、上田市の浦野川など県内4カ所の千曲川支流と本流で稚魚を放している。このうち上水内郡信濃町の鳥居川での放流に参加した。雪が降りしきり、水温は4度だったが、子どもたちはめげずに取り組んだ◆「水辺の会」によると、放流の日程を知った中信地方の複数の人から問い合わせがあったという。昭和の初めまでは信濃川（新潟県）の上流の千曲川でも犀川でもサケ漁が行われていた。市川健夫さんの「信州学大全」に詳しい。当時を知る人もいるだろう◆かつては犀川水系でも、サケは支流の梓川を上高地あたりにまでさかのぼっている。現在は期待したくても無理である。長野市から東筑摩郡生坂村にかけての犀川で、五つある東京電力のダムに魚道がないからだ。サケばかりか、どの魚も行き来できない◆東電は、下流の飯山市の千曲川にある西大滝ダムで、魚道を改修中だ。流域の自治体などの提言を受け、大小さまざまな魚が上りやすくなるようにする。サケなどの大型魚用は水深が10センチから25センチになる。サケにも“難所”だっただけに今秋の遡上に期待したい。

信濃毎日新聞　H25.3.13 発行

上田 サケ戻る日楽しみ

「サケさん、大きくなって帰ってきてね」。千曲川支流の浦野川でサケの稚魚を放流する子どもたち＝9日、上田市小泉

【記事33面に】

信濃毎日新聞　H25.3.10 発行

新潟日報　2013年(平成25年)3月18日(月曜日)

サケきらめく川目指し

十日町 宮中ダム

児童ら稚魚放流

サケの銀りんがきらめく信濃川を目指し、十日町市のJR東日本信濃川発電所宮中ダムの下流で17日、市民ら約280人が稚魚を放流した。

NPO法人「新潟水辺の会」(新潟市)が2007年に始め、JR東が10年から共催している。ことしは宮中ダム周辺で今月中に約19万匹を放流する。

信濃川にサケの稚魚を放流する子どもたち＝17日、十日町市

稚魚は、ふ化場を持つ中魚沼漁業協同組合のほか、同市の田沢小、下条小の児童が体長5センチほどに育てた。参加者は稚魚を入れたバケツを持って川岸へ向かうと、稚魚の体が傷つかないように、ゆっくりと水の中でバケツを傾けた。

クラスで育てた稚魚を放した田沢小4年の服部颯太君(10)は「思ったより多くが死んでしまって、育てるのは難しかった。放したサケには大きくなって帰ってきてほしい」と海を目指す小さな命を見送った。

新潟日報　H25.3.18 発行

津南で初放流

新潟水辺の会など

信濃川にサケの稚魚を

ＪＲ東・宮中取水ダムの不正取水で水利権取り消し後、５年間の暫定水利権を取得し今年４年目の試験放流に入っている信濃川中流域。同ダムの魚道を改良し４月１日から全国初となる「変動型放流（自然流況型放流）」の実施を前に17日、

津南エリアで初めて実施したサケの稚魚放流（17日、信濃川合流点付近の中津川で）

ＮＰＯ新潟水辺の会（共同代表・大熊孝新潟大名誉教授）が中心になり、宮中ダム下流と津南町の中津川合流地点でサケの稚魚合わせて５万尾を放流。４年後の回帰に大きな期待をかけた。大熊代表は「信濃川の河川環境改善で、サケ回帰に大きな期待が寄せられる」と今後も稚ザケの放流活動を続けていく方針だ。

津南町エリアで初めての放流となった「鮭稚魚の町民環境放流」は、信濃川右岸の中津川合流付近で津南町教育委員会と共催で実施。放流付近は明治期から信濃川に木の枝などを編んで両岸につなげサケ漁を行っていた歴史がある岨滝の近く。当日は住民ら60人余りが参集、体長５㌢、１・３㌘ほどの稚魚を放流した。参加した芦ヶ崎小１年の石田彩夏さんは「大きくなって戻ってきてねー」と呼びかけ、一般参加した小木曽茂子さんは「いっぱい戻ってきてほしいですね。４年後が楽しみです」と期待。桑原正教育長は「町内では初めての放流で回帰への期待が高まっている。小学校でサケの稚魚育成に取り組むなどして更に関心を高めていきたい」と話している。

一方、ＪＲ東日本宮中ダム下流ではＪＲ東の共催でサケの稚魚３万匹を放流した。地元児童や親子連れなど230人余が参集し信濃川に放流した。この日、学校で稚魚を育てた田沢小４年生35人も参加し一緒に放流。児童のひとり、樋熊瑞希さんは「サケが戻る４年後はもう中学生。ちゃんと戻って来て、再会しようね」と稚魚を感慨深そうに見送った。この日は昨年設置された魚道観察室も開放し、大勢で賑った。

なお、水辺の会では今期、西大滝ダムや上田市など長野県内の千曲川などを含め約19万匹を放流、「多くのサケが遡上する信濃川・千曲川」にするよう運動する方針だ。

津南新聞

H25.3.22 発行